

## レヴィ＝ストロースの遺産としての日本

——『月のもう一面——日本に関するテキスト』、『近代社会の問題点に直面する人類学』  
スイユ社(パリ)2011年春

——*L'Autre face de la lune – Écrits sur le Japon et L'Anthropologie face aux problèmes du monde moderne*,  
Seuil, Paris, avril 2011.

杉淵 洋一

2011年4月、フランスを代表する出版社の一つスイユ社 Seuil から二十年強にわたって刊行が続けられているコレクション《21世紀の書齋 La Librairie du XXI<sup>e</sup> siècle》<sup>1</sup>より、フランス現代思想界最後の巨人の一人と称されるクロード・レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss (以下、CLS と略す。)の名を作者に冠した『月のもう一面——日本に関するテキスト *L'Autre face de la lune – Écrits sur le Japon*』、『近代社会の問題点に直面する人類学 *L'Anthropologie face aux problèmes du monde moderne*』という二冊の書籍が出版された。黒い帯が施され、それぞれの表面に「レヴィ＝ストロースと日本」、「未刊行三講演」という白抜き文字が書かれている<sup>2</sup>。後者には、書籍の監修を行ったモーリス・オランデルが序文 (*Avant-propos par Maurice Olender*) を寄せ、その冒頭には、「CLS は、1986年春、四度目の日本滞在に際して、この本を構成することになる三つの章を草している。国際文化教育交流財団(石坂財団)の招きによって東京で開催された三回の講演のためにである。」<sup>3</sup>とある。

2011年4月8日付の新聞『ル・モンド』には、「レヴィ＝ストロース・日本への眼差し——思想家の知られざる部分に光を当てた未公刊テキストによる二つの選集」<sup>4</sup>と銘を打った、二冊の書籍の発刊を宣伝するフレデリック・ケック氏による記事が掲載されている。同じくフランスの有力紙である『リベラシオン』においても、ナタリー・レビザル氏が、「クロード・レヴィ＝ストロースへの日出づる国の影響」<sup>5</sup>なるタイトルで書評が執

筆されており、二冊の書籍が、CLS の日本に寄せる思い(日本観)、日本との関係を考慮して編纂されたものであることが理解される。

2009年10月30日、世界的な人類学者であったCLS は、百年にわたる長途の人生に終止符を打ち、我々の住む世界から旅立っていった。1908年に生を受けていることを考えると、20世紀は《CLS の世紀》、1949年に博士論文『親族の基本構造』がパリのフランス大学出版局(PUF)より公刊され、世にその名を構造主義の旗手として轟かせる契機となったことを考えると、20世紀後半は、《CLS の時代》であったと語り継がれていくことであろう。

このように知のパラダイムを形成することによって一つのエポックを担った博学多才さに比して、CLS の日本への眼差し、日本文化への情熱といったものには、注目されてしかるべき点が多々あるにも関わらず、

CLAUDE  
LÉVI-STRAUSS  
L'AUTRE FACE  
DE LA LUNE  
ÉCRITS SUR LE JAPON



CLAUDE  
LÉVI-STRAUSS  
L'ANTHROPOLOGIE  
FACE AUX  
PROBLÈMES  
DU MONDE MODERNE



(特に欧米の研究者、愛読者の間において)看過されるがままに今日を迎えてしまったきらいがある。しかしながら、生前、この不世出の文化人類学者には、確かに日本文化への多大な関心があり、日本との関係には浅からぬものがあったのである<sup>6</sup>。それも本人が、「私の知的、並びに道徳的側面の形成に、日本の文明が与えたものよりも早い時期に影響を与えたものはない。」<sup>7</sup>と明言していたように、関係の端緒をその幼年時代にまで遡ることができる。

CLSの父・レイモンは印象派の画家であり、同時代同派の画家たちの例に漏れず、ヨーロッパにもたらされた日本の浮世絵によって深く魅了された一人であった。幼い頃のCLSは、学校での成績の席次が良かった時に、父が若かりし日に収集していた浮世絵をご褒美としてプレゼントされ、子供心に日本文化と親しみを深めていたのである。この習慣はCLSが5、6歳の頃より始まったとされ、父から一番最初にもらった浮世絵のことを、「今でもその絵のことを思い出すことが出来る。海を背景にした大きな松林の下を女性たちが歩いている様を描いた、とても古びて、額のない広重の版画だった。」<sup>8</sup>と残している。このようにして父から与えられていた浮世絵への熱狂を糸口に、CLSは、歌川国芳の『通俗水滸伝豪傑百八人』を通して曲亭馬琴の文芸を学び、鯉絵を通して地震にまつわる民間信仰を知るなど、のちにライフワークとなる文化人類学研究を《日本文化》という材料を使って幼心にも実践していたともいえる。

その後、日本の文化への愛着が消失してしまうことはなかったものの、社会学の教授として渡ったブラジルにおけるアメリカ先住民の研究への没頭などにより、CLSにとっての日本は、副次的な関心の対象としかなりえない時期が続いた。

そんなCLSではあったが、自身が「まさしく青天の霹靂のようにして訪れた。」<sup>9</sup>と振り返るように、1977年10月17日から六週間、国際交流基金の招きによって、《幼き日に夢見た楽園》<sup>10</sup>である日本の地を夫人とともに、69歳にして初めて滞在する機会をえることになる<sup>11</sup>。泰西においては、〈人〉の仕事と〈自然〉のなす業は、相反する能動と受動の関係として明確に峻別されて理解されているのに対し、日本においては、〈人〉と〈自然〉が一蓮托生のもので互いに共鳴しているという考えを、吉田光邦氏、渡辺守章氏らとの交流から抱き、

石坂財団に要請して、東京、大阪、京都といった大都市のみならず、隠岐諸島、能登半島、金沢、高山、岡山などといった、所謂、日本の僻地といえるような場所にまで足を伸ばし、当地の酒造業者、刀鍛冶、金箔師、木材旋盤工といった職人たちと交流の機会を持っている<sup>12</sup>。

そして実際に目の当たりにした日本という国の第一印象として、西洋には無い形式での《ユマニテ》の豊かさを挙げています。その点に着目ながら、研究対象として日本を捉え始めている事は、その後の日本についての言及、ないしは日本人研究者たちとの交流から容易に想像することができる。このことを証するかのように、1980年、国際文化教育財団の諮問委員であった仏文学者・前田陽一氏が、財団が主催する石坂レクチャーズでの講演を依頼するとCLSは、「日本には大変興味をもっている、こういう重要な講演をお引き受けするには研究をある程度進めたいので、お引き受けすることにしたい」<sup>13</sup>と慎重に返答しており、CLSの日本に対する思いがたいへん真摯なものであったことがうかがわれる。この講演が実現するのは、1986年の〈石坂講演シリーズ第八回目〉に際してであり、前田氏の依頼から六年という歳月を待たなければならなかった。(CLSは1988年まで、実に五度にわたって日本に滞在している。)そして、86年の4月15、16日に行われた三回の講演を収載したものが、この度、スイコ社から刊行と相成った『近代社会の問題点に直面する人類学』である。

本書は、

序文(モーリス・オランダール)…9

I. 西洋における文化的優越性の終焉…11

II. 現代における重要三問題:セクシャリティ、経済開発、神話思想…59

III. 文化的多様性についての認識——我々が日本の文明を学ぶこと…105<sup>14</sup>

と、三部(三講演)立ての構成となっている。第一部においては、人類学という学問の《ユマニスム》としての位置づけ、第二部では、人類学が現代社会の抱える危機的問題を解決する可能性を自らを取り上げたテーマから模索し、三部では、文化相対主義への疑義と、人類学が日本社会から学べる点について検討を加えている。当時のCLSの人類学者としての立ち位置を明瞭に照ら

し出す、まさに「学生や若い世代にとって、CLSの著作が譲し出す卓抜した〈知〉への最良の入門書」<sup>15</sup>となりえる一冊である。

そして、同書と軌を一にして出版された『月のもう一面——日本に関するテキスト』についてであるが、こちらは、川田氏による「序文」の中に、「1979年から2001年の間に執筆された未刊行、もしくは、日本においてのみ学術誌上に掲載されたテキストを、初めてまとめた本であり、人々は、この書籍の内に、日本を愛したレヴィ＝ストロースの姿を見出すであろう。」<sup>16</sup>とされるように、人類学者としての日本観、日本人研究者たちとの交流などが中心となっており、読み進めていくうちに読者は、CLSの率直な日本への思いや日本との関わりを知ることになる。

書籍は全204頁で編まれ、

序文 (川田順造) …7
世界における日本文化の位置 [1990] …13
月の裏側 [1979] …57
因幡の白兔 [2002] …79
東シナ海のヘロドトス [1987] …91
仙厓——順応の芸術 [1994] …109
異質性の馴致 [1998] …127
天鈿女命における淫らな舞踏 [2001] …133
知られざる東京 [2001] …149
川田順造との対談 [1993] …157 <sup>17</sup>

という日本に関連した九つのトピックの集合体として成り立っている。巻末に収められている1993年、NHKがパリで行った対談の聞き手を務め、「大学院の学生時代、フランスに留学してレヴィ＝ストロース教授の講義やセミナーにも出席し、教授に直接教えるを受ける機会」<sup>18</sup>に恵まれて親炙に浴して以来、CLSの最晩年に至るまで、家族ぐるみの付き合いを続けたアフリカ民族学研究所の泰斗・川田順造氏が本書に序文を寄せている。(川田氏の近著『文化を交差させる——人類学者の眼』(青土社2010)の冒頭には、それに呼応するかのようにして、「公刊を前提とした文章としては、本書のための序文が絶筆となった」<sup>19</sup>とされる「クロード・レヴィ＝ストロース教授の序文」<sup>20</sup>が記されている。)

CLSの無尽蔵の知性による、因幡の白兔、天鈿女命、

アマミキヨなどの日本の神話を筆頭に、日本の文芸、美術への卓越した分析もさることながら、CLSの間人らしい温かな眼差しがテキストから浮かび上がってくるのは、主に日本での滞在内容が描かれた「月の裏側」や「知られざる東京」などのトピックである。特に後者と「川田順造との対談」においては、1986年の日本滞在時に、川田氏の配慮によって、隅田川の川下りをしたことが述べられている。そこでCLSが目にしたものとは、北斎の「墨田川兩岸一覽」を彷彿とさせる、〈木造の家〉、〈昔ながらの出で立ちの釣り人〉などに代表される伝統的な「外国人たちの多くは眼にすることない東京」<sup>21</sup>の姿であり、そこに、ベニスにも匹敵する文明の成功の形のの一つを見出し、深く感銘を受けたと回想している。

176頁と177頁の間には、この川下りの折に撮影された写真二葉を含めて計十葉の写真が挿入されている。これらの写真は、日本で既に公刊されたCLS関係の書籍で目にすることも出来るが、「モニク・レヴィ＝ストロース夫人の許可を得て、モーリス・オランダールに、(CLSの)日常生活を写した写真の幾つかを加えることを提案した。数枚は、1986年に日本で撮られたものである。それから、コレージュ・ド・フランスの社会人類学研究所とマロニエ通り(パリ16区)の彼の家でのもの。そして、別荘があった田舎・リニュロル村(オーヴェルニュ地方アリエ県)での特別な時間を写真に収めたものである。」<sup>22</sup>という川田氏の説明が付け加えられている。愛犬と戯れる姿などは、学究の世界においては〈戦闘的姿勢〉で知られていたCLSのもう一つの顔を垣間見せてくれるものである。

リベラシオン紙でレヴィザル氏は、二冊のテキストを、「避けて通れないものではなく、レヴィ＝ストロースの思想を一新するものではなく、ましてや進展させるものでもない。しかし、人々はそのに、魅力的で心を動かされる幾らかの直感を見出す。」と、作品が読者に放つ魅力や感興の強さについては言及しているものの、学術的な進捗という意味における評価をまるで与えていない。しかし大久保喬樹氏は、CLSの研究を引き継いだ後進たちによる日本研究の進展によって、「新しい段階の日本の発見、すなわち、これまでの個人的、感性的、哲学的レベルでの日本に代わる、組織的、社会学的、文化人類学的にほんの発見が始まるだろう。」<sup>23</sup>という展望を述べている。この発見が既に始まっていることは、

コレージュ・ド・フランスでの百歳記念シンポジウムにおいて、マーシャル・サーリンズ Marshall Sahlins も指摘するところである。<sup>24</sup>

2011年春における、フランスの書肆からのCLSの日本に関連した二冊の書籍（特にこれまでフランス語原文の出版がなかったテキスト）の刊行は、CLSが母国語としたフランス語圏の読者達に、「CLSが見た、そして体験した日本」というフィルターを通して、新たな可能性の扉を様々な領域で開くという意味で、極めて有意義な事業であったといえる。何よりこの出版によって、今後世に出るであろうCLS関連の書籍に付与される著述目録の欄に、フランス語書籍として二冊が加わる権利を得たのであり、これを契機にフランス語圏の研究者たちによって、母国語のテキストとして、これまでの日本の研究者たちとは異なった視点で、更なる分析が程なく加えられていくことになる。そしていずれは、言語的な性質や地政学的な親縁性によって、英語をはじめとする西洋の言語に訳されることも予想されよう。もしこれらの話による翻訳が現実のもととなれば、中東やアフリカの言語に翻訳される機運も生まれてくるに違いない。

そこでは、CLSが提唱した「ブリコラージュ」の考え方を川田氏が敷衍させた《文化の三角測量》、つまり「対象から引き離された視点を二つ取り、対象と計測点の三点を相互に変換することで、文化の理解における主観を相対化しようとする目論見」<sup>25</sup>が《四角測量》、《五角測量》ともなって、新たな地平を多元的に切り開き、CLSが遺した知の遺産を大きく前進、発展させることになるであろう。このような可能性を胚胎する二冊の書籍の刊行は、未知の領域への飽くなきCLSの人類学としての探求心と、そこに感化され、自身の道を切り開いた川田順造氏の師への恩義と愛情の証といえる。

(Claude Lévi-Strauss, *L'Anthropologie face aux problèmes du monde moderne*, Seuil, Paris, avril 2011.)

(Claude Lévi-Strauss, *L'Autre face de la lune – Écrits sur le Japon*, Seuil, Paris, avril 2011.)

1

このコレクションは、20世紀における〈人種〉概念の発生過程についての研究の大家であるフランス社会科学研究所 (EHESS) 教授・モーリス・オランダールが監修者となって1985年に始めたアシェット社 Hachette の《20世紀のテキスト》コレクションが先駆けとなっている。1989年9月、オランダールは、版元をスイコ社に移し《20世紀の書齋》として刊行を再開し、2001年1月以降は、コレクション名を《21世紀の書齋》と改め、現在(2011年12月)まで発刊を続けている。コレクションは160冊を越え、既に古典ともいえるジョルジュ・ペレック、ジャン・スタロバンスキ、イタロ・カルヴィーノから、現在も精力的に文筆を続けるジャック・ランシエール、アントワーヌ・コンパニオン、アントニオ・タブッキなどの作品を渉猟しており、まさに21世紀の書齋を飾るに相応しいセレクションとなっている。

2

未刊行というのは、あくまでもフランス(仏語)で一般書籍として刊行されていないという意味であり、前者中の多くは日本において既に日本語に翻訳されて出版されているものや、フランスの学術誌に掲載されたものから構成されている。後者に関して、1986年春の東京での講演「現代社会の諸問題に、人類学はいかに答えるか」に際して記されたもので、1988年に『現代社会と人類学——第三のユマニズムをもとめて』と題され、原文のフランス語テキスト付きで、川田順造、渡辺公三の日本語翻訳により、サイマル出版会より刊行されている。(「ミシェル・フーコーのコレージュ・ド・フランスにおける講義録のように、これまで、これらの講演テキストは、イタリア語翻訳によって流通していた。」ともある。Frédéric Keck, « Lévi-Strauss, un regard japonais », *Le Monde*, le 8, avril, 2011. 参照。)

3

Maurice Olender, « Avant-propos », Claude Lévi-Strauss, *L'Anthropologie face aux problèmes du monde moderne*, Seuil, Paris, 2011, p.9. ※本文におけるフランス語原文の日本語訳のタイトル、概念等は、本邦において既に広く人口に膾炙しているものもあるが、特に注をつけていない場合、原文に従って本文執筆者が適宜、拙訳を施した。

4

Frédéric Keck, « Lévi-Strauss, un regard japonais », *ibid.*

5

Nathalie Lévisalles, « Claude Lévi-Strauss sous l'emprise du Soleil levant », *Libération*, le 7, avril, 2011.

6

CLSは、日仏両国の友好関係の促進に寄与した功績を日本政府より認められ、1993年春、勲二等旭日重光章(外国人叙勲)を授かっている。

7

Kawada Junzo, « Préface par Kawada Junzo », Claude Lévi-Strauss, *L'Autre face de la lune – Écrits sur le Japon*, Seuil, Paris, 2011, p.7.

※本文は拙訳であるが、『月のもう一面』に収載されている川田順造の「序文」におけるCLSによる回想文の引用部分(7頁~10頁)は、川田氏自身により「日本語読者へのメッセージ」として、1977年に中央公論社から上梓された『悲しき熱帯』の上巻(7頁~9頁)に、「1967年3月20日 クロード・レヴィ=ストロース」という署名とともに日本語に訳出されている。

8

Kawada Junzo, « *Préface par Kawada Junzo* », *ibid.*

9

Claude Lévi-Strauss, « *Entretien avec Junzo Kawada* », *L'Autre face de la lune*, *ibid.* p.161.

10

Kawada Junzo, « *Préface par Kawada Junzo* », *ibid.* p.9. ※CLSはこの言葉を、シャルル・ボードレー『悪の華』所収の詩 *Moesta et errabunda*(悲しみと放浪) から引用している。

11

この初の来日時(1977年)に行われた四回の公演と、大橋保夫氏との二回の対談については、レヴィ=ストロース『構造・神話・労働』(編・大橋保夫)みず書房(1979)として書籍化されている。なかでも、10月27日の朝日講堂(東京)、11月14日の国立京都国際会館(京都)での二回の講演については、フランス語の原文が付けられて、『民俗学者の責任・構造主義再考』(大橋保夫・三好都朗訳)国際交流基金(1979)として出版されている。

12

Cf. Claude Lévi-Strauss, « *La Face cachée de la lune* », *L'Autre face de la lune*, *ibid.* pp.59-60.

13

前田陽一「待ちに待った講演」クロード・レヴィ=ストロース『現代社会と人類学——第三のユマニズムを求めて』サイマル出版会1988, p.1.

14

注2で指摘したとおり、この講演録には既に、川田順造、渡辺公三両氏による日本語訳が存在しているが、原文のニュアンスを残したかったので拙訳を施した。原文、ならびに川田、渡辺両氏による日本語訳と照らし合わせて理解していただければ幸いである。

15

Maurice Olender, « *Avant-propos* », *ibid.* p.10.

16

Kawada Junzo, « *Préface par Kawada Junzo* », *L'Autre face de la lune*, *ibid.* p.10.

17

[ ] 内部には、書籍の183頁~184頁に記されている「初出一覧 Sources」に従って、それぞれのテキストの初出の年を記した。

18

川田順造「二十二年ののちに——レヴィ=ストロースにきく」レヴィ=ストロース『悲しき熱帯・上』(1955)中央公論社1977, p.x. ※川田順造氏は1962年から3年間(~65年)、(アフリカ社会の政治組織)を研究課題として、ソルボンヌ大学(パリ)に留学している。ちなみに、川田氏の当地における指導教官は、反構造主義(反レヴィ=ストロース)派のアフリカ社会研究の人類学者・ジョルジュ・バランディエ George Balandier である。

19

川田順造「あとがき」『文化を交差させる——人類学者の眼』青土社2010, p.231.

20

クロード・レヴィ=ストロース「クロード・レヴィ=ストロース教授の序文」川田順造『文化を交差させる』同前, pp.7-11. 参照。

21

Claude Lévi-Strauss, « *Entretien avec Kawada Junzo* », *ibid.* p.166.

22

Kawada Junzo, « *Préface par Kawada Junzo* », *ibid.* pp.10-11. ※引用文中の括弧及び、括弧内は、本文執筆者が施した。リヌヨル村(人口約600人強)が属するアリエ県は、フランスのほぼ中央に存する。

23

大久保喬樹「クロード・レヴィ=ストロース——多文化融合モデルとしての日本」『見出された日本——ロティからレヴィ=ストロースまで』平凡社2001, p.222.

24

フレデリック・ケック「レヴィ=ストロースと鳥インフルエンザ」(訳・山崎吾郎)『現代思想 2010年1月号』青土社2011, p.239. 参照。 ※ケック氏はここで、シンポジウムの際にサーリンズが、思想家の仕事は必ず乗り越えられるものであり、「ここ数年のフランスの若い研究者たちは、哲学者も人類学者も、まだ生きているうちにレヴィ=ストロースの仕事を再発見しはじめています。」と述べたことを明記している。

25

川田順造「あとがき」同前, pp.238-239.